特定非営利活動法人
日本リザルツ

平成29年度
事業報告書

日本リザルツ
平成30年3月5日作成

05
MAY

2017 年 5 月 1 日

らぽーる新規スタッフの紹介

今月より、離婚と親子の相談室「らぽーる」で勤務することになった、臨床心理士の大川です。
教育分野や家族療法などが専門だ。らぽーるでは、未成年のお子さんがいらっしゃるご夫婦の別居・離婚に関するご相談や、お父さんとお母さんのことで悩んだり不安になっているお子さんのご相談を、電話で受け付けている。そして、相談者に必要な各種情報の提供や、ご要望に応じて弁護士（ADR、訴訟等）、臨床心理士、面会交流支援団体等を紹介している。離婚や夫婦関係でお悩みの方のサポートや、子どもの幸せを考えた離婚ができるように全力でサポートしていきたいと思う。

メーデー雑感

今日から５月。大型連休の谷間でありながら、朝の電車は思いのほか混みあっていた。
メーデーと言うと、労働組合の集会の様だが、元は夏のお祭り。アメリカ人に会社の公休を話した際に、「ああ、夏のお祭りの休日だね」と言われて、キョトンとしたことがある。
確かに、欧州の街の広場にメイポールと呼ばれる柱を立てて、その周りで踊る光景をテレビで見たことがあった。メイポールは、一か月近くそのままになっている場所もあるようで、そうした柱を外国の田舎で見たこともある。
もっとも、サラリーマン生活で、外国から「メーデー」とメールが来て、「すわ、突発事項か」と緊張したこともあった。こちらは、救難信号。SOS のメールも多様で、「Houston, we have a problem」というメールも受けたことがある。これは、映画のアポロ１３でトム・ハンクスが、ヒューストンの管制センターに宇宙船の作動不良を報告する最初の言葉。作動不良と言えば、2001 年宇宙の旅のコンピューターの HAL が単調に繰り返す Malfunction という言葉が印象的だった。
やはり、５月１日は、初夏の爽やかな一日というのが一番良い。

Ready For さんからの靴寄贈！

日本リザルツが始めた運動靴回収事業、Q&AAA（トリプルエー）+プロジェクト。

今日も全国から続々と運動靴が届いている。そして、クラウドファンディングの担当だった Ready For の齋藤悠太さんが学生時代にスニーカーの販売店で働いていたそうで、「会社で集めます！」とご協力していただいた。

生憎、東京は突然の大雨だったが、オフィスに来ていただき、感謝状の贈呈を行った。「本当は直接渡したかった…」と仰っていた運動靴は、大雨のため郵送で送られるとのこと。

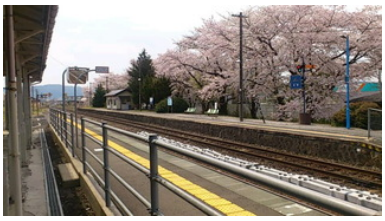
2017 年 5 月 2 日

朝日新聞「声」投稿記事に思う

朝日新聞「声」に平成２８年１０月１４日と平成２９年４月２９日に佐々木泉さんという方が、投稿されていた。おそらく、同一の方と思う。離婚を経験され、子どもと暮らす同居親の立場からのご意見。平成２８年１０月は子どもと同居親は別居親に対しての思いが同じとは限らないというもの、平成２９年４月は子どもは親の所有物ではない、大人の事情に子どもを巻き込んではいけないというもの、どちらも「本当にその通りです」と、私はしばらく目を閉じてしまった。「この方もこの考えに辿り着くまでどんな道をきたのだろう」と私は思った。私は離婚と親子の相談室らぽーるで相談員をしている。自分自身も大変つらい思いをされているお父さん、お母さんが真に子どもの気持ちに立つことが簡単ではないことを痛感している。それでも、ＡＤＲや親教育プログラム事業を通して「子どもファースト離婚」を伝え続けている。自分の力不足で苦しくなることもある。らぽーるは同居親の方にとっても別居親の方にとってもぬくもりのある相談室でありたい。つらい時にじっと何も言わずそばに寄り添っていられるような・・・それが子どもの幸せにつながり、社会が変わることを信じて。

離婚と親子の相談室
らぽ～る
前厚生労働省調査研究事業

春



春たけなわの季節となった。
写真は 4 月 29 日に撮影された東北の満開の桜。

5 月 3 日に撮影された東北の菜の花。

こちらの写真は三久ビルの裏にある公園のつつじ。こちらも今が盛り。

花ではないが、先日小田急線の鶴川駅の近くの高校の先輩の自宅へタケノコ堀りに行ってきた。今年はあまり出ていないと言われていたのですが、12 時頃にのこのこと行ってみると 40 本ほどのタケノコが並んでいた。先輩の自宅の裏が竹藪になっていて、毎年春になると知り合いの方達を招いて何回かタケノコ堀りを行っているそうで、今回は小さなお子さんもいれて、20 人ほどが集まった。お昼には、庭で鉄板でバーベキューです。掘りたてのタケノコを小さく切ってチンジャオロースを作ったり、野菜やウインナーソーセージを焼いたり、焼きそばを作ったりと楽しい集まりだった。私も小さいのを 2 本いただいて、アパートの大家さんに差し上げた。他の方達も 5～6 本ほど持ち帰り、ご近所の方にも差し上げている。

ボランティアの有難さ

ケニアの過疎地で、住民に甚大な被害をもたらせている“スナノミ症”対策の一環として、当団体が呼び掛けている靴の回収活動は、全国から善意の靴が毎日のように送られてきている。既に保管場所である会議室も、テーブルと椅子が窮屈そうに、隅に寄せられている。送られてきた靴はこれから現地に送ることになるが、靴の状態を確認し、再度、袋詰めの作業を行っている。この作業を担っていただいているのが、ボランティアの方たちで、事務所に来ていただき、丁寧に袋詰めをされている。大量の靴を航空便で輸送するため、出来るだけスペースを取らない工夫も必要とされる。普段の業務で忙しいスタッフにとって、少ない時間でも手伝っていただける、ボランティアの存在は大変ありがたく、感謝している。靴を送る方も善意で、それを袋詰めする方も善意で、こうした皆さんの協力が今後実を結ぶ日を心待ちにしている。

連休前に外を見ると

明日 5 月 3 日憲法記念日から連休後半が始まり、当団体の事務所がある霞が関にも、つかの間の静寂が訪れる。平日でもビジネス街や繁華街ではないので、さほど騒々しさはないが、首相官邸や議員会館など政府機関の建物に隣接する場所柄、抗議デモや宣伝カーなどの音が、響き渡る日がよくある。しばしの静けさも外に目を向ければ、ミサイルや核実験の懸念材料だけでなく、トランプ大統領の選挙中の言葉「America First」に代表される他、ユーロ各国での極右政党の台頭のように、自国(民) 優先策が一定の支持を受けていることだ。確かに自国の経済・社会の安定はいつの政権にとっても政策の柱である。グローバル化、難民の大量流入など自国の責めに帰さない要因で、負担を強いられるのには限度があるかも知れない。そのような流れを気にかけているのは、私一人ではない様な気がする。ODA(政府開発援助)、日本も開発途上国向けにかなりの支援金を拠出している。他の先進国も金額の差はあれ、国際協力の一端を担っている。自国優先策が先行すれば、他国への支援は後回しにされかねない。今のところそのような兆候は現れていないようだが、予想してもおかしくはない。逆説的に考えれば、途上国を支援し早く先進国並みに安定させれば、難民問題を含め、自国が被ったと思われる弊害や負担が軽減されることに、結びつくことになるのではないかと思う。ポピュリズム(自国民迎合)に捉われず、途上国の発展・安定に寄与することの意義を疎かにしてほしくない。

釜石生活 56 ～ホースセラピー～

H29 年度も、「青葉通り こどもの相談室」は、相談会、研修会、親子交流会等、様々なイベントを計画している。6 月 10 日（土）の親子交流会では、初めてバスをチャーターして「三陸駒舎」というところへ「ホースセラピー」を体験しに行く予定だ。ホースセラピーとは、馬の世話や乗馬など、馬との関わりを通して、カラダの中から湧き出る意欲やバランス感覚、コミュニケーション能力など、心豊かに生きるために必要な力を育むというもの。大まかなスケジュールを載せたチラシを作成するにあたって、「三陸駒舎」に周辺の下見と、管理者の黍原豊さんとのお打合せに伺った。

携帯の電波も入らないその場所は釜石市の中心部から車で 40 分ほどのところにあり、手作りっ

ぽい看板と、やさしい目をした白馬が迎えてくれた。馬を介して、普段と違う親子のコミュニケーションが促進されるよう最善を尽くしたいと思う。

釜石生活 57 ～アンガーマネージメント～

5 月 2 日、都内で日本アンガーマネージメント協会主催の「アンガーマネージメント キッズインストラクター養成講座」を受講した。まず、アンガーマネージメントとは何か、について学び、それを子どもたち（だいたい幼児期～小学生）にどのような言葉で、どのようなワークで伝えていくかを学んだ。
子どもたちがアンガーマネージメントができるようになると、怒る必要のあることは上手に怒れ、怒る必要のないことは怒らなくなる。また、他人を傷つけず、自分を傷つけず、ものを壊さず、上手に怒っていることを表現できるようになる。

テキストはこちらを使い、風船や、M&Ms チョコレートを使ったりして、アンガーマネージメントの理論とテクニックを小さな子どもにも分かりやすく、すぐ実践できる形で説明する。そして、「怒りを反射的にぶつけない、自分の要求や感情を適切に表現する方法を身に付ける」のを目指す。「キレやすい子が増えた」と言われるが、こうした感情教育が幼児期から行われることで、将来の DV 加害者を減らすことにもつながるのではないか、と感じた。釜石の子どもたちと取り組むのが楽しみだ。

2017年05月03日

ゴミ対策あれこれ

私事で恐縮だが、ここ暫くソファーベッドをベッドに使っている。背もたれ部分が水平に倒れるはずが、いつのまにか次第に水平より低く下がる様になった。ひっくり返してみると、背もたれを倒す際に、支えになる棒を引き出す機構が付いていた。決してスマートな設計とは言えないが、それなりの補強にはなっている。が、取り扱い説明書にはその機構が全く記入されていない。おそらくは、耐久性不足に気が付いたメーカーが、後から仕様変更をしたものの、説明書の訂正は怠ったのだろう。人によっては怒るかもしれないが、エンジニアの端くれとして苦笑いをしたくなる。少なくとも、それで長期使用に耐えそうな変更にはなっていたので、ソファーを買い替える必要はなくなった。一方で、すぐに電源が切れる様になった我が家の掃除機は、バッテリーを交換するしかないらしい。それも、掃除機のモーターを含む本体の過半を占める大きさで、金額もそれに見合うレベル。保証期間を過ぎたばかりだというのに。リチウム電池の危険性を考えると、バッテリーとモーターを一体にしたしっかりとした構造設計にし、機能が低下したら、その部分をそっくり取り換えるという設計思想は理解できるが、バッテリーだけの問題なのに殆ど本体全体をそっくり交換するのはあまりに勿体無いという気持ちは残る。先日は、炊飯器の小さなボタン乾電池を交換するのに、自分では交換できず、メーカー指定の場所に持参して、交換に一週間。調理家電で、毒物を含む電池を使用者が勝手に交換できない構造にするのは、設計上は理解できるが、数グラムの乾電池一個の交換の為に、重い炊飯器を遠くまで運ぶ消費者は多くないかもしれない。かくして、家電製品は、短期でゴミになって、新製品に買い替えられてしまう。資源の有効利用とゴミ削減を考えると、いささか考えさせられる。以前に、クリントン大統領夫人が中国で飛行機に乗っている際、眼下の川の周囲が白く縁どられているのを見て、あの綺麗な花は何かと中国高官に尋ねたという。白く点在していたのは、実は、花ではなく放置されたポリ袋。それ以来、中国政府はゴミの放置対策に熱を入れたとか。つい最近、カリフォルニアの海岸でプラスチックのストローの使用禁止の動きがあるとのニュースがあった。フランスでは、プラスチックの食器の禁止の動きも有るという。それはそれで立派だが、ゴミ対策は、それほど単純かなという思いも無いではない。ドイツの野外音楽会で、集まった人たちが椅子を持ち出し、蝋燭を周囲に点灯し、プラスチックのシャンパングラスで発泡ワインを飲みながら音楽を楽しんでいるのを見たことがある。さすが、スパークリングワイン生産量世界一の国。無粋な紙コップではなく、細長いシャンパングラスが蝋燭の光に映えて、映画の場面の様な優雅な雰囲気。ガラスでは割れて危険だと思うと、一概にプラスチックの食器を禁止するのも、大げさに言えば文化の伝承を妨げる面もあるかもしれない。もっとも、プラスチックの食器が禁止されると、野球場でどうやってビールを飲むのか、と嘆きたくなる下世話な気持ちの方が強いかもしれないが。

ナイロビ生活 Vol9″特別編″

ケニアでは今週の月曜日(5 月 1 日)、Labour Day(レイバー・デー)、つまりメーデーがあり、祝日だった。その月曜日の早朝 5 時過ぎ、外が騒がしく目が覚めて、ちらっと外を見ると大規模なデモ行進が行われていた。アパートメントの警備員に話を聞いてみると「あれは公務員たちがおこしているデモで労働条件と給与の未払いが原因さ。あの程度の規模では、大手メディアには取り上げられないね。しかもメディアはいつも政府側の報道しかしない。」と話してくれた。Labour Day(労働者の日)、メーデーは労働者が統一して権利要求と連帯の活動を行う日。その一環のデモ行進だったようだ。それにしてもケニアにいると人々は「悪の元凶はすべて政府のせいだ」というマインドがある気がする。私も一部そう思う節もしばしばあるが、「すべて政府のせい」というとなんだか違和感がある。

2017 年 05 月 05 日

ナイロビ生活 Vol10"特別編 2"

本日は、来週に開催されるマルチステークホルダー会合に向けたスタッフミーティングを行った。皆が集合し、着席したときからスマートフォンをテーブルに置きタイマーを 15 分でセット。「15 分間集中して話し合い、そのあとでゆっくりのんびりランチを食べよう」と提案した。すぐに「前回お願いしていたスピーカーたちに招待状は出した？」と中身に入っていった。そしてあらかじめ考えておいた質問を次々に投げていき、話し合いたかった内容を 15 分で終えました。私も疲れましたが、皆疲れていた。その後は打ち合わせ終了として、各自好きなようにランチをとった。やはりギュッと詰まった 15 分の打ち合わせにはじめは困惑していたが、理解を示してくれ、今後はこういう風にしていこうと決めた。私もケニアの文化や慣習を理解して尊重しているが、理解しがたい悪い慣習というのもあることを承知しながら対応していく。

2017 年 05 月 06 日

釜石生活 58 ～アンガーマネージメント入門講座～

5 月 3 日には、大人に向けた「アンガーマネージメント入門講座」を受講した。前日の「キッズインストラクター養成講座」でも、もちろん「アンガーマネージメント」の基礎知識を学びましたが、駆け足で概論を学んだため、その復習にもなりましたし、概論を用いて、自分の中の怒りの感情について分析することもできた。ひとつだけ、「アンガーマネージメント」のエッセンスを紹介しますと、一般社団法人 アンガーマネージメント協会では、私たちを怒らせる

ものの正体は、自分の願望、希望、欲求を象徴する言葉「べき」であると言われる。誰でも、たくさんの「べき」を持っている。小さなこだわりから、絶対譲れないレベルまで、いろいろな「べき」を持っていて、その「こうあるべきだ！」という理想と現実のギャップが怒る理由である、ということだ。怒る必要のあることは上手に怒れ、怒る必要のないことは怒らなくなる、また、他人を傷つけず、自分を傷つけず、ものを壊さず、上手に怒っていることを表現できる、そんな境地に立てるよう、「感情日記」なるものを記していこうかな、と思っている。

2017 年 05 月 08 日

運動靴が全国から！

日本リザルツが始めた運動靴回収事業、Q&AAA（トリプルエー）+プロジェクト。 連休明けの日本リザルツオフィスには、宅急便が全国から続々と届いた。

Ready For さんや公明党の皆様のほか、企業の方々の協力も増えている。また、運動靴の整理をしに来てくださるボランティアの方もおり、応援団の輪が広がっている。日本リザルツでは今月、運動靴をケニアに輸送する予定だ。

「差別」と「区別」　①

連休中にプロ野球を見に行ってきた。三塁側に座ったのだが、周囲をホームチームのファンに囲まれ、ビジターチームの応援には肩身が狭い。選手の紹介一つとっても、ホームチームは派手だが、ビジターの方はなおざり。「差別だ」と怒ってみても、多勢に無勢。スポーツなら肩を竦めて終わりだが、一般社会では当然ながら「差別」は禁物。以前に職場で「差別」という言葉を無くそうという動きがあった。かなりのケースは「区別」という言葉で置き換えられないこともないが、どうしてもニュアンスが異なる。「差異」ならほぼ同じ意味を伝えられるが、耳で聞くと理解されにくいので口頭では使いにくい。しかも、「〇〇する」という動詞的な使い方が出来ない。それに、「製品の差別化」という使い慣れたマーケテング用語の言い換えは簡単ではない。結局、「差別」という用語は、今でもビジネス社会で生き残っているのではないか。差別という言葉を使わなければ、差別という現実もなくなるなんて安易な話は成立するはずもなく、一種の言葉狩の様なものだが、「差別」と「区別」の差を意識するのは、今でも重要な気がする。多国籍環境で仕事をしていた時、付き合いの壁には３種あると教わった。年齢（Age）、性別（Gender）、人種（Race）で、後にいくほど「区別」を克服するのが難しくなるという。自分でも、経験的に納得がいく。年齢の差は、比較的乗り越えやすい。相手の性格や環境によっては、年齢の差を意識しないで済むケースすらある。性別については、考え方や思考法におのずと差はあっても、それでも協力関係を構築するのは、手の届く範囲であるケースが多い様に感じる。ここで重要なのは、「差」があることは当たり前と認めて、それ以外の領域で共有する考え方をベースに人間関係を築くことだろう。「差」の存在まで否定するのは無理がある。例えば、私自身は仕事に関しては男性に多い一つの業務に集中する「シングルワーク集中型」。女性に多い複数の業務を平行して進める「マルチワーク型」は苦手。得意・不得意やアプローチの仕方には「差」があると理解していた方が、互いに協力し易い様に思う。ただ、人種の差になると、問題が一気に難しくなる。そこでの「区別」は深刻な事態を招くことが少なくない。

日本語の奥深さ

日本リザルツの職員は、自分が行っている業務を多くの人に周知すべく、今、皆様が見ていらっしゃる公式ブログにあげることになっている。ブログを見ていて思うのは、それぞれの職員によって、個性が出ていること。

まずは写真派の方々。ケニアの白石さんはセンセーショナルな写真、話材を沢山送ってくれますし、釜石の鈴木さんは四季折々現地の風景を送ってくださる。見ているだけで刺激を受け、癒される。ご自身の意見を真剣に書いてくださるのは（中）さん、（局チョー）さん。普段、ご自身が感じていることを率直にブログに書いている。あ！こういう見方もあったんだな～と

気づきを得ることも多い。そして、なんと日本リザルツは会計担当もブログを書いているの。リザルツ職員のブログ更新は今後増えていく予定だ！

「差別」と「区別」　その②

前のブログで、年齢（Age）、性別（Gender）、人種（Race）の三つの壁について記した。その中で、人種の壁は最も乗り越えるのが難しい。それは、肌の色といった外観の「区別」だけにとどまらず、その人の育った歴史・背景に伴う文化的な「差」を含むから。育った文化・環境は物の考え方に圧倒的な影響を与えるだけに、そうした「差」の量と質については、時として想像することすらも難しいから。人種の異なる相手の文化の「差」の前に、相手の育った文化の考え方の「差」の理解が容易ではないから。それだけに、人種の壁は、外観の「差」というより、相手の文化に対する無知が大きな原因になっていると言えるだろう。従って、世界の様々な文化への理解が進めば、あるいは世界がグローバル化して共通の文化的基盤が成立すれば、人種を越えた理解が産まれて、対立が解消され、人種に基づく「差別」が減るはず・・・・だった。ところが、世界は相変わらず人種的対立に満ちている。人種差別が公に語られることは減ったのだろうが、実質的な改善の道はまだまだ遠い。むしろ、民族対立や、部族対立、宗教対立といった対立の芽は、あちこちに噴き出している。今更ながらという気もするが、イスラムとキリスト教の文明の衝突という古めかしい思想の亡霊が漂っている。西と東が共存する国のはずだったトルコもイスラム化の道を強めている East is East and West is West, and never the twain shall meet と言われて、百年以上もたっているのに、その言葉を覆す力は生まれてこない。グローバル化の流れをあざ笑うように、「区別」が「差別」に直結してしまっている。IT 革命が進行し、世界中の情報が共有できるようになり、少なくとも指導者層は世界のニュースに瞬時にアクセスできる。歴史的知識も科学的知識も、一般にずっと普及してきている。世界がグローバル化し、文化が均質化して、多様性が失われる危険性さえ懸念される時代だというのに。情報革命によって地理的距離が事実上無視できるようになったのに、心理的距離は少しも近づいていないようだ。そしてなぜか、こうした現象は、先進国のポピュリズムの勃興とも気を通じている。グローバル化によって同質化され易いがゆえに、過去よりぐっと縮まったはずの「差」を従来以上に意識する様になり、わずかな「差」を強調する心理的なトレンドが進行している。そこでは、「区別」を「差別」に暴力的に転化するメカニズムが発動している様だ。アメリカやイギリス等の先進国で生じたポピュリズムの動きは、オランダやフランスでは一定の歯止めがかかった様に見えるものの、深く静かに国内社会の分断化が進行している様に思われる。そして、日本でも同様のプロセスが進行しているらしい。

2017 年 05 月 09 日

ナイロビ生活 Vol11"カルヴィンと大親友になろう編"

(CHV へ助言をするカルヴィン,右がカルヴィン)

CHV と一緒に結核患者宅を回り、CHV の活動を支えるのが彼の仕事です。ケニア西部の街にある病院で働いていた経験を持つカルヴィン、ものすごく心強いパートナー。もちろん結核に関しても深い知識をもち、リザルツの活動を理解してくれている。昨日今日(5/8-5/9)は月例の CHV ミーティングを開催した。毎月のレポートを CHV 全員から集めて分析、カンゲミヘルスセンターの職員、ウェストランド準郡の方々が彼らにアドバイスをするためのミーティングだ。それらの意味に加え、CHV の決起集会のような意味も持ち合わせている。同じカンゲミ地区に過ごしていても CHV と顔をあわせることはあまり無いらしく、この CHV ミーティングで CHV のさらなるモチベーションアップを図り一体感を作り出している。

今日もカルヴィンが話しているとき、CHV は真剣に耳を傾け、分からないことがあればすぐに手を挙げ質問をする。カルヴィンはその質問に対し真剣に答える。とても良い関係を築けていると感じました。彼はスタッフと CHV を繋ぐ架け橋になっている。

2017 年 05 月 10 日

釜石生活 60 ～山林火災～

釜石市の山林火災は発生から 3 日目を迎えた。火の勢いは弱まっているそうだが、現場周辺では昨夜も夜を徹した警戒が続いた。この山林火災で 9 日までに 400 ヘクタールが焼失したとみられている。避難指示が出ている尾崎白浜地区では、9 日、集落から約 300 メートルの地点まで火が迫ったそうだ。

9 日は町中が白く煙って、焦げ臭いにおいがたち込めていたが、今日は朝から雨模様で、灰を洗い流してくれている。車のワイパーを動かした端には、真っ黒な灰のかたまりができていた。山林火災によって、山を追われた熊や鹿が町におりてくるようで、今朝はいつもよりたくさんの鹿を見たし、朝 6 時半ごろから「熊出没注意」のアナウンスが流れていた。早く鎮火してほしいものだ。

逢沢先生がリザルツを訪問されました！

昨日 9 日、逢沢一郎先生がリザルツ事務所を訪問された。リザルツでは、運動靴回収事業、Q&AAA（トリプルエー）+プロジェクトを行っており、今までにもケニアへの出張の際には、スーツケースに入るだけの靴を届けてきた。会議室の一部を占領している皆様から送られた靴を一度まとめて、今月ケニアに輸送する予定で、その前に逢沢先生が見学にみえた。

靴整理のボランティアの方々も一緒に。

ケニア議員団来日

本日夕方、ケニア国家議会の中にある「院内規制委員会」のメンバー8 名が、第一衆議院議員会館を訪れ、日本アフリカ連合友好議員連盟会長の逢沢先生はじめ、同連盟の議員の方々と会談された。今回訪日の目的の一つは、日本の国会の仕組み、運営方法や予算作成などについて、調査し自国の制度に反映させることと思われる。ケニアでは 2010 年に立法・行政機関の制度が大きく変更になり、国会も二院制(国民会議と上院)が取り入れられた。そのため会談中、ケニア側議員から多くの質問が投げかけられた。予算作成時の国民の意向をどのように対処するか、女性の地位向上、社会進出への援対策などについての質問が出た一方で、自民党の強さや長く議員を務められる理由も、聞かれていた。ここで何故会談の内容を報告できたか、即ち会談に同席していたか説明する。話は会談から離れるが、リザルツが現在ケニアの過疎地で、住民に甚大な被害をもたらせている“スナノミ症”対策の一環として、使った靴を回収しケニアに送る運動を展開しているが、通関手続きや関税が大きな課題となっている。大使館や政府機関にいろいろ掛け合っている中、今回の議員団訪日の機を捉え、スナノミ症への関心と通関手続きへの配慮を直接訴える機会を、逢沢先生の有難いご厚意により、与えていただいた。また、会談中に三原先生から、同席していた私たちをケニアの議員の方々に紹介していただいた。これによって持参したスナノミ症の実態や結核予防・啓発活動の写真を見ていただくことができた。全く予期していなかった、また非常に良いタイミングで直接ケニアの議員に話を聞いていただいたことに感謝したい。また、ケニアでは今年 8 月に総選挙が実施される。今回のメンバーの方たちが再選され我々の活動のより良き理解者となることを期待する。

「差別」と「区別」　　その３

前項で、社会が均質化していくと、僅かな「差」が今まで以上に意識され、それが、「区別」に、そして「差別」にまで進行し易くなると書いた。日本の外を眺めてみると、本来は文化的にも経済的にも近いばかりか、西欧化の洗礼を受けてますます似てくるはずの日・中・韓の三国の関係は、改善する兆しが見えない。むしろ、三国間の心理的距離は、次第に離れてきている様に思う。韓国の新大統領の選出も、関係改善に訳に立つかどうか。日本の内を見ても、従来から問題になっている各種の「差別」に加えて、「東北大地震から避難した子どもに対するいじめ」や、「公園デビューをする母親の仲間外れ」など、僅かな「差」を原因とする新種の「差別」が発生している。おそらくは、微細な「差」を理由とする「社会のクラスター化」が進行しているのではないか。そうした「区別」に経済的な「格差の拡大」が加わって、社会の分裂が進行しているようだ。社会が均質化して、国家や個人間の「差」が現実には減っているというのに、「区別」が意識され、社会的「差別」が減らない。グローバル化と情報社会の到来は、必ずしも社会の分断の溝を埋められず、むしろ、社会を小さな単位に小分割し、社会から疎外される（と感じる）人を大量に産み出していく。それでいて、文化や個性はますます均質化し、多様性の維持を訴える声は次第に大きくなってきている。「差別」の問題は本当に難しい。それも、均質社会の中での僅かな「差」を問題とする「似た者同士の区別」が「似た者同士の差別」にまで発展しまうことで、「差別の解消」はますます難しくなってきている。その結果、本来なら「人種差別」など発生するはずのない比較的均質な社会においても、「人種差別」に該当しそうな「差別」が発生し、人間関係の大きな壁として立ちふさがっている。かつては「人種」という明白な差による壁は、壁の内側では一定の同質性を保障していたと言うのに、今では矮小な「差」に起因する「ミクロな人種差別」の壁が、社会を縦横無尽に切り裂いているのを感じる。民族的多様性には乏しい日本でも、新たな種類の「人種差別」が多方面で多様に発生しているようだ。外観からも「差」が明らかな「年齢」や「性別」の壁が時代と共に低くなっているのを感じるのに、こうした判別しにくい「人種」の壁は、乗り越えるのが非常に難しく感じてしまう。少なくとも、特効薬は無さそうだ。

「差別」と「区別」　その４

日本での新たな「差別」の発生を考える上で、気になるのは日本語の特性に起因する現象だ。英語の「I」と「YOU」のように、ギリシャ・ローマ系言語は、単純な一人称と二人称を使う。ところが、日本語の場合は、一人称をとっても、「私」「わたし」「わたくし」「ぼく」「俺」「吾輩」「小生」「自分」など多種多様。自分の産まれ育ち、状況における自分の立ち位置と、話す相手との関係によって使い分けがされる。つまり、周囲との「関係性」で言葉を使い分けている。二人称も同様。日本人は、無意識のうちに常に相互の「関係性」を考えざるを得ず、また一人称、二人称の使い分けによって話し手の立場を推察する。かくして、周囲との「関係性」に鋭敏になる結果、周囲との微妙な「差」を嗅ぎ分けることに敏感になり、矮小な「差」が「区別」を産み、「差別」に繋がり易くなっているのではないか。加えて、他国に比して均質な社会の中で、「関係性」を意識せざるを得ないから、余計に微妙な「差」を探し出すことになる。

日本の社会の分断は、こうした日本語の特性も一因となっているのではと思うと、「差別」の解消の道はまことに険しいと言わざるを得ない。余談になるが、欧米の小説には、語り手の年齢や性別が最後まで判らない小説もある。日本語では非常に短い小説しか通用しない手法だろうが、アングロサクソン言語では長編が成立することを考えても、日本語の「関係性」意識の強烈さが頷けよう。とはいえ、日本語の呪縛から逃れるすべは無く、「関係性」意識が「差別」に繋がらぬ様に、自らを意識的に律するしか方法は無いのかもしれない。

2017 年 05 月１１日

弁護士会館前にてチラシ配り

本日は、霞が関の、日本郵政や弁護士会館前にて、らぽーるのコミュニケーションセミナーのチラシ配りをしてきた。

セミナーに参加されずとも、離婚の際に子どもの幸せを第一に考えることや、ADR（裁判外紛争解決手続き）などの方法があったりすることを、一人でも多くの方に知っていただけたら嬉しい。

弁護士会館前にてチラシ配りをしていると、日本橋さくら法律事務所の上野晃先生が通りかかり、応援してくださった。

2017 年 05 月 11 日

HPLF に関する NGO・外務省意見交換会プログラム

11 日、HPLF に関する NGO・外務省意見交換会プログラムが開かれ、多くの NGO が参加し、闊達な意見交換が行われた。私も出席し、以下のコメントをさせていただいた。困っている人の声なき声を拾うこと。これが誰一人取り残さない社会（SDGs）の真髄だ。絶対的貧困層のケニア・エスンバ村には、薬はもちろん水も食べ物もなく、スナノミ症もまん延している。人々は絶望の淵に立ち、子どもたちには笑顔がみられない。5 月 16 日に日本リザルツの代表白須と私は日本を出国し、このエスンバ村に行く。
こうした人たちに目を向け、手を差し伸べることが必要なのではないか。思いやりのある世界の実現に向け、皆様には、現地を見て、生の声を拾っていただきたいと願っている。外務省での会議後は、経済産業省の前で行っているつなみ募金に合流。参加された NGO の皆様も、丁度、つなみ募金の実施場所を通られたので、チラシをお渡しし、活動を見ていただいた。

2017 年 05 月 12 日

ナイロビ生活 vol.12 "マルチステークホルダー会合編"

5 月 10 日にマルチステークホルダー会合を開催した。

ナイロビ市郡保健省から医師の Dr. ASMA

ウェストランド準郡保健省から我らのスタッフの Zafarani

Dr. Asma からはナイロビ市郡として結核の問題をどのように捉えているのか。それだけではなくスラム街における「公衆衛生状態」と「結核を含む感染症」との関係性を専門的な目線で発言されていた。

カンゲミの地区長は、カンゲミ地域における CHV の活動には、地域にとって非常に大きなインパンクトがあり、今後も CHV の活動を地域として歓迎し応援すると発言された。

最後は CHVs から、各ユニットの代表、計 4 名が登壇した。
各ユニットでのチャレンジと抱える問題に対する改善点を分析し、今後 3 ヶ月のプランも発表した。

ダンスが終わった後で私も 3 分だけ時間を貰った。お金と時間の価値について、簡単に話してみた。今日が 5 月 10 日、あと 3 ヶ月で今年度の事業は終了する。この時間を我々にとって価値のあるものにできるかは、それは我々が時間の価値を認識できるかにかかっている。

2017 年 05 月 15 日

５．７研究会「SDGs とグローバル連帯税を考える」報告

5 月 7 日東京医科歯科大学のセミナー室で第 1 回研究会「持続可能な開発目標（SDGs）とグローバル連帯税を考える」を開催し、ちょうどセミナー室が満杯になる 35 人が参加し、熱い議論をたたかわせた。

冒頭、田中徹二・グローバル連帯税フォーラム代表理事が、「今回の第 1 回研究会はクラウドファンディングによる企画である。SDGs とグローバル連帯税のそれぞれの第一人者をお招きした。じっくりお話を聞き議論していただくことを期待する」とあいさつ。
さっそく稲場雅紀・SDGs 市民社会ネットワーク代表理事と金子文夫・横浜市立大学名誉教授から SDGs とグローバル連帯税についてそれぞれ講演していただいた。
お二人のもっとも肝となる点を一つずつ紹介する。まず、「SDGs は 17 のゴール 169 のターゲットがあるが、これを二言で表わすと、①世界から貧困をなくすこと、②“つづかない世界”を“つづく世界”に変えること、と言える」（稲場氏）。
また「今日のグローバル化した社会において、地域社会には地方税があり、国家には国税があ

るように、グローバル社会にはグローバル税が必要だが、地球的規模の課題が山積しているにも係わらずそのような税はない。今こそ国民から地球市民へと意識転換させ、グローバル連帯税を目指さなければならない」（金子先生）。
講演の後パネル討論を行った。この討論で質問意見が相次ぎ熱い議論をたたかわせ、予定時間を 30 分オーバーしてしまった。

【速報】参議院決算委員会で石橋議員、国際連帯税につき質問

本日（15 日）の参議院決算委員会で石橋通宏議員（国際連帯税創設を求める議員連盟事務局長）が国際連帯税について質問をされた（他に ODA 全般）。

・石橋議員：SDGs の資金ギャップは 2.5 兆ドルと言われている。資金を増やすには（ODA のほかに）国際連帯税や革新的資金調達メカニズムという構想もある。世界のリーダーとしての日本というなら、国際連帯税実現含め資金増を行うべき。

・岸田外務大臣：国際開発資金を確保するためには財政もさることながら、民間資金も含めた幅広い調達が必要。その中で国際連帯税も有力な手段であると外務省は認識している。平成 22 年度より外務省は税制改正で国際連帯税を要望し続けている。具体的にどうするかだが、昨年度外部のシンクタンクに具体的な制度設計につき委託調査してもらった。この調査結果を踏まえ、国民と関係者の理解を得るための努力をしていく。外務省としても私個人としてもぜひ国際連帯税導入に向け前向きにしっかりと取り組みを続けていきたい。

・石橋議員：委託調査の結論は 3 月に出ているが、次なるステップをどうするのか。大臣としての責任で次に進むことを確約すべき。

・岸田外務大臣：調査に制度設計をお願いしたのだから、その答えを踏まえながら具体的取り組みを進めていきたい。

2017 年 05 月 15 日

「区別」と「差別」　あれこれ補遺①

「区別」と「差別」という文章を少し長く書かせて貰った。その際、「人種」という言葉を、判っていながら不正確に使ったことを明記しておきたい。ホモサピエンスとしての人類は、たとえ外観が多少は違っても、遺伝的にほぼ相同であって複数の種に分化しておらず、所詮は一つの「種」でしかなく、「人種」という言葉そのものが学問的には不適切であると言う点。古くから使われている、コーカソイド、モンゴロイド、アングロ・サクソンなどの表現も、「人種」を特定する意味は持ちえない。つまり、人類学的に見て、人間に「人種」という「区別」は無いと言う点である。それなのに、人間は敢えて「区別」を探し、「差別」を生み出す厄介な動物の様だ。そうした特性を表現する意味で、人間がわずかな「差」を問題にする性向を表現するために、学問的な正確さを無視して「人種」という言葉を使わせてもらった。「人種差別」は歴然として存在するが、実は「人種」は存在しないという点は、明確にしておきたい。先日、大学の物理学の教授が「原子核の周りの軌道を電子が高速で回転している」と新聞に記していた。一般向けの解説だから単純化して説明したのだろうが、量子力学的には、電子が原子核の周囲を回っているとは言えないので、学問的な正確さは欠いている。ただ、イメージを伝えるのには便利な表現だ。例えば、炭素は、外郭電子が 3p 軌道を回っており、その電子が他の原子の外郭電子とペアを作ることで結合する。3p 軌道は、酸素や窒素、水素等と電子軌道のペアを作りやすく、かつ、常温・常圧で適度に安定しやすい。だから、炭素を骨格として、アミノ酸が形成され、複雑な立体構造のタンパク質を産み、生命を構成するようになった。こうした特性の元素は炭素とケイ素しかなく、生命体が存在するとしたら、ケイ素生物か炭素生物しか考えられないと言われる所以である。地球上の生物の存在は、炭素(Carbon)の 3p 軌道(Orbit)を抜きにしては語れない。だから、ジョージ・ルーカスは、スターウオーズに登場するヒューマノイドに C3PO という名前を付けた、というのは良くできた冗談である。

2017 年 05 月 16 日

靴の整理と箱詰め

ケニアの「スナノミ症」防止のために、全国の皆さんのご厚意で集まった使用済の靴は、何度か本ブログで紹介していますが、ボランテイアの方々のご協力も得て、サイズ毎に分類し、箱詰めをした。
その数、段ボールにして１００個。靴の数量として３，２５０足。大きな部屋の半分を占めている。

釜石生活 61 ～弁護士相談会～

5 月 13 日（土）、弁護士相談会を開催した。
4 月末に来釜していた（6 月から日本リザルツ スタッフとなる）冨澤さんによる相談会看板を椅子の上に置いた。

ダンボール箱を利用して作成してくれましたが、その手作りの温かさとかわいらしさで、入り口も明るくやわらかい雰囲気になった。

今日の相談は 2 件で、ご担当されたのは、「釜石ひまわり基金法律事務所」の、加藤静香先生の後任の多田創一先生。相談内容はやはり、未成年の子どものいる夫婦の離婚に際してのことで、釜石でも、婚姻届の受理数：離婚届の受理数= 3:1 で、全国平均より若干高い数値となっている。相談者ごとに、弁護士の先生とのお話しの後、レビューする時間を取りたいと思いつつ、次の相談者が待っているので、レビューやフォローはできてなかった。今回は、その当日にはできなかったが、月曜日、火曜日でフォローアップができた。
相談後のレビューやフォローでは今回も、多田先生が回答された内容を 60%くらいしか理解されていなかったり、確かに聞いてはいたのに、メモしておらず忘れていたこともあった。こうしたレビューというかアフターケアというかフォローアップは必要だと実感した。

2017 年 05 月 17 日

「差別」と「区別」　　補遺あれこれ②

日本語の一人称と二人称が、環境や置かれた立場などの「関係性」を色濃く帯びた使用法をされると書いた。それは、会話や文藝への影響も強いが、卑近な例として推理小説の例を挙げておこう。英国の戦前の推理小説で、警官が素人探偵に「ため口」で話したり、「命令口調」で話しかけたりする翻訳を、ここ数年に複数冊、読んだことがある。現代ならいざ知らず、階級社会の色濃い時代に、明らかに「紳士階級」に属する素人探偵に対して、労働者階級である警官が話す口調とは思えない。警官の側で、内心の反感はあっても、口調はあくまで敬意をこめた丁寧な調子でないと日本語としてはおかしい。が、英語に明確な敬語表現もなく、「I」と

「You」の代名詞だけでは、日本語に直した際の口調を推察するのは難しいかも知れない。が、翻訳者の誤訳であるのは間違いないだろう。米国で非常に有名だが、日本ではあまり人気が出ない推理小説に、ネロ・ウルフのシリーズがある。エキセントリックな私立探偵と助手、料理人と園芸家の四人が同居する不思議な環境だが、語り手の助手の年齢や風貌、立場などが明確にはされず、小説の中でしか成立しない、対等の様で対等でない不思議な人間関係が表現された一種の御伽話になっている。ところが、日本語で「I」と「You」を訳すと、語り手の年齢や経歴、雇用主との関係などが明確になって、その途端に「現実にはありえない」人間関係であることが明らかになって、微妙な面白さが失われてしまう。日本語の翻訳では残念ながら味気ないこと甚だしく、これでは、日本では人気が出にくいのも無理はない。といって、その責任を翻訳者に背負わせるのは無理があろう。日本人が、人称代名詞によって常に「関係性」を強く意識していることを示すものだが、そうした関係性意識の強烈さが、他人との「差」を強く意識させて日本社会特有の「差別」に繋がることがないのか、それが杞憂であればよいのだが。

いざ、エチオピアとケニアへ！

日本リザルツの代表白須と長坂は 5 月 16 日に日本を出国し、エチオピアとケニア周遊の旅に出ている。運動靴の運搬を協力して下さるエチオピア航空さんに乗り、約 1 日近い長旅を得て、無事にエチオピアに到着した。

今回の旅の目的は 2 つ。

1. エチオピアで開催される IFNA パートナーシップ会議に出席すること

3 月にイボンヌ・チャカチャカさんが JICA を訪問した際、イボンヌさんが IFNA のチャンピオンになることが決まった。

今回の会議は、イボンヌさんがチャンピオン就任後の初の任務です。栄養に携わる NGO として、そして、イボンヌさんが立ち上げたプリンセス・アフリカ財団のキャンペーン事務局として、その様子を見届けたい！ということで参加が決まった。

2. ケニア最貧困地域、エスンバ村に日本で集めた運動靴を届けること

日本リザルツが始めた Q&AAA+プロジェクト。全国から続々と運動靴が寄せられている。すでに、整理が済んだ 3250 足が箱詰めされている。

代表の白須とスナノミお姉さん長坂が、直接、現地の NGO 代表エドワード、そしてケニアで活動を行う白石陸さんとともにエスンバの子どもたちに届けに行く。

2017 年 05 月 18 日

ナイロビ生活 vol.13 "結核患者と会いました編

先日、カルヴィン、1 人の CHV と一緒にカンゲミの町を歩き、結核患者宅を訪問した。前日に雨が降っていたため、水たまりが多く靴を泥まみれになりながら歩き、30 分程で家に到着した。患者の方は 30 歳に先月なったばかりの女性で、数年前に結婚し 1 歳の最近歩けるようになったという赤ちゃんがいた。旦那さんはカンゲミの溶接工で、収入は安定しており、家も立派に見えた。しかし、今年に入ってから咳が止まらなくなり、体全体がだるく、動けなくなったとのこと。それを旦那さんを介して聞いた CHV が家を訪問、カンゲミヘルスセンターに連れていった。結果を待っている間に、立ちくらみ、目眩で意識を失い倒れてしまうことがあったらしい。(カルヴィンが"Orthostatic hypotension"だと説明してくれた。『起立性低血圧症』。そして結果はポジティブ。4 月末から薬の投与が始まった。
以上簡単なレポートだが、カルヴィンが詳しいレポートをまとめてくれている。

靴がいよいよケニアに！

先日、靴の箱詰めについて本ブログでご紹介したが、ケニアに向けて発送するため、今朝リザルツ事務所から成田空港へ向けて、靴の箱の山をトラックに載せて運び出した。トラックは公明党さん、飛行機はエチオピア航空さんのご厚意によるもので運ばれた。

公明党政務調査会の比留間さんと箱の山(一部)

そして、皆さまのご厚意の詰まった靴の箱が、成田空港の配送センターに運ばれた。日本の通関で書類審査を経て、明日、香港経由でエチオピアへ。アジス・アベバで別の飛行機に乗せ換えられて、ケニアのナイロビへ。長い空の旅が待っている

2017 年 05 月 19 日

ナイロビ生活 vol.14 "カンゲミ地区長と仲良くなろう編"

マルチ会合の中で、CHV から提案のあった"清掃活動"。スラム街の衛生環境は劣悪で、このような状況が結核を含む感染症拡大の原因になっている。それを証明するように、本日(5/18)ケニア国内のメディアは一斉に"Cholera outbreak reported in Nairobi(ナイロビ市でコレラが発生)"と見出しの記事を掲載した。これらの報道を受け、我々のチームであるウェストランド準郡のスタッフから「カンゲミでは一切食べ物を口にしないように」という連絡を受けた。衛生環境は感染症と相関的な関係にあり、結核についても例外ではない。こうした経緯もあって、マルチ会合で CHV から強く要望があり、"地域社会の、地域社会による、地域社会のための Clean-up Champaign"を企画している。そのためには地域社会の強力なサポートが必要不可欠で、先日カンゲミ地区長にお会いし、「清掃活動には地区長として最大限の努力をする」と約束していただいた。

東京に戻って

長期出張から帰国して約１カ月が過ぎた。ナイロビでは無縁だった通勤ラッシュや通勤時間にも慣れ、歩く機会が少なかった頃に比べると、体力・健康にはプラスになると言い聞かせながら、自宅と事務所を往復している。出張期間中は現地で実施中の結核予防・啓発活動を中心に、会計処理等の整備が業務の中心であったが、東京事務所では当然のことながら業務の範囲は広く、事務仕事だけでは収まらない。帰国早々昨年度の“世界栄養報告に関するフォーラム”や“SDGｓに向けた人口と食料安全保障会議”に出席する機会があり、関わりの少なかった分野で行われている事業や活動に触れることが出来た。また国際協力活動を行う他のNGO/NPO との会合にも顔を出し、国への要望や課題となっている事柄を通して、全体の動きや方向性を垣間見ることも出来たようだ。また、ここ数日はスナノミ症対策のため、全国から送られてきた善意の靴を、ケニアのエスンバ村まで輸送する為、靴の仕分けや梱包を行い、多くの段ボールを搬出する作業に当たった。今回のようなケースは初めてと言ってよいかもしれないが、様ざまな事態を経験しながら、一つ一つ克服していく過程で新たな抗体が出来上がっていくのではないかと思う。

IFNA パートナーシップ会議（1 日目）

日本リザルツの代表の白須と長坂は IFNA パートナーシップ会議への参加のため、エチオピアに来ている。本日は IFNA パートナーシップ会議の 1 日目。

エチオピアはもちろん、ケニア、ガーナ、セネガル、マダガスカルなどアフリカ各国の関係各省庁はじめ、国際機関や学術機関などから多くの方が参加した。

会議は、開催地エチオピアの保健省や農水省、NEPAD、アフリカ連合などの幹部の挨拶で始まり、皆、日本政府への栄養に関する取り組みと IFNA 発足に感謝の意を、そして IFNA 推進へ期待の念を述べていた。会議には IFNA のチャンピオン、イボンヌ・チャカチャカさんも参加。誰一人取り残さない社会（SDGs）を目指すためにも栄養改善が重要であることと述べた上で、歌も披露され、会場は大歓声に包まれた。

続いて、IFNA 設立とこれまでの取り組みの経緯について簡単な説明があった後、各国の事例が紹介された。午後からは、今後どのように IFNA を含め、アフリカで栄養改善に向けた取り組みを進めるのがよいか、様々な観点からパネルディスカッションが行われた。

また、マルチセクターで栄養改善を進めるためにどうすればよいかという議論では、ローカルレベルでも、様々な関係者が連携し合うことが重要であることが提唱されていた。最後のパネルディスカッションでは、短期だけでなく、中期、長期な視点を持って効果的な栄養改善プログラムを作成するためのメカニズムが紹介されていた。

ガザの子どもが朝日新聞に登場

リザルツは 2015 年 11 月にガザの中学生 3 名と校長先生の合計 4 名を招待しているが、その中のガイダさんについての記事が、本日の朝日新聞に掲載されていたので紹介する。

「希望捨てない」日本に学ぶ

2015 年 11 月 1 日深夜に来日した 4 人は、翌日から東洋英和女学院高等部を訪問、釜石市で凧揚げ、安倍晋三内閣総理大臣、山口那津男公明党代表に表敬訪問、虎ノ門病院見学、デイズニーランド、浅草見学をし、11 月 6 日深夜に帰国の途についている。将来、海外の大学で学びたいとの希望が実現することを切に願っている。

釜石生活 62 ～生活応援センター～

今日は、釜石市の中でも、相談室からは一番遠い栗橋地区というエリアへチラシを持って行っ

た。

私はこの「生活応援センター」という名称が気に入っている。釜石市は 8 つのエリアに分かれていて、各エリアに「生活応援センター」が設置されている。各センターには、保健師などの職員が配置され、保健・医療・福祉・生涯学習（公民館）活動のほか、住民票の発行などの行政窓口を一体化した総合的なサービスを行っている。また、生活応援センターでは、地域住民といっしょに考え、ともに実行する「協働」の取り組みを進めている。地域の現状を捉え課題を見出し、自分たちにできることは何か？を確認しながら、人と人とのネットワークをつくり、健康で安心して暮らせるまちづくりを目指している場所である。

IFNA パートナーシップ会議（2 日目）

本日は IFNA パートナーシップ会議の 2 日目。昨日の会議の内容をおさらいした後は、引き続き、IFNA のターゲット国の栄養に関する取り組みと課題が紹介された。各国共通して課題に挙げていたのは、キャパシティの不足（資金・人材育成とも）、そしてより効果的にプロジェクトを行うためのモニタリングの必要性だ。また、栄養に関する問題は飢餓や栄養不良だけではありません。偏った栄養摂取による肥満や糖尿病などの問題も生じていることが紹介されていた。

この後は、研究機関、国際機関、そして NGO の栄養改善における取り組みが紹介された。ここでは、日本リザルツのスタッフ長坂が栄養改善に携わる NGO の代表として挨拶をした。英語でのスピーチに加え、エチオピアの言葉「アムハラ語」での挨拶にも挑戦。この日のためにエチオピア大使館に頼んで、訳を作成してもらい、エチオピア航空の添乗員やホテルのスタッフの方と一緒に特訓したそうだ。スピーチでは、栄養改善を推進するために、研究や政策立案などについて NGO も参加できる仕組みづくりを求めた。この後は、IFNA のロゴを決め、IFNA の更なる推進を確認し、本会議は終了した。夕方からは、日本リザルツ主催で「ドーナツラウンドテーブル」が開

かれました。なんとイボンヌ・チャカチャカさんもスペシャルゲストとして参加された。国際機関や NGO、各国政府関係者など多くの本会議参加者の方が出席され、大盛況のうちに「ドーナツラウンドテーブル」は終了した。

2017 年 05 月 22 日

IFNA パートナーシップ会議（写真編）

日本リザルツの代表の白須とスタッフ長坂は、5 月 18 日、19 日にエチオピアで開かれた IFNA パートナーシップ会議へ参加しました。ターゲット国の政府の方、国際機関、NGO など多くの方が参加されました。

エチオピア政府の方のご挨拶で会議はスタート。IFNA のチャンピオン、イボンヌ・チャカチャカさんも参加。ご挨拶＆歌で会場は大盛り上がりだった。国際機関から、研究機関から今後の取り組みについて様々なアプローチが提案されました。

レセプションでもイボンヌさんは大人気。第 1 回 IFNA パートナーシップ会議の開催を祝し、ここでもお歌を披露された。

JICA の加藤理事、榎本上級審議役とも記念撮影。2日目。各ターゲット国の課題が紹介される。

最後はみんなで記念撮影。

会議後に開催したドーナツラウンドテーブル。

こちらにもイボンヌさんが参加して下さった。

特製のドーナツは大好評！
何よりも、お互いが本音ベースで率直な意見交換をする場となった。

スナノミ症の衝撃写真

参議院予算委員会の代表質問にも取り上げられるなど、日本でも関心の高まっているスナノミ症。
今日は現地でスナノミ症抑止に取り組む NGO 代表のエドワードから衝撃の写真が送られてきたので、紹介する。

エドワードが活動するエスンバ村では、写真のような深刻なスナノミ症患者がたくさんいる。多くが最貧困層と呼ばれる人たちで、感染者の多くがお年寄りと子どもたちだ。誰一人取り残さない社会（SDGs）を目指すために、日本リザルツもスナノミ症抑止を応援していく。

ガザの子どもが朝日新聞に登場-2

本日の朝日新聞にまたまたガザの子どもの記事が掲載された。
2015 年 7 月に国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）の清田明宏（せいた あきひろ）保健局長による「ガザ 戦争しか知らない子どもたち」が出版された。その表紙になったイマン・カーセムさんのその後が記事になっている。
職員たちの間でもイマンさんは今どうしているか度々話題になっていたが、その後の様子がわかった。

傷ついたからこそ人を救いたい

彼女は現在 17 歳の高校生で、「産婦人科医になって、ガザの女性や子どもの命を救いたい」と語った。
その夢が実現することを心から祈る。

2017 年 05 月 23 日

トウモロコシの知恵

近くの都民農園の野菜が青々と育っている。細長く分割された農地を借りて、プロの指導を受けながら農業体験が受けられる。私も十年程前に経験し、農家の苦労と野菜の育つ驚きを、ほんのちょっぴり体験した。中で、トウモロコシを育てた体験は記憶に残っている。トウモロコシは色々な意味で不思議な穀物で、個人的にも昔から興味を持っている。その一つが、珍しい C4 植物だと言う事。光合成の過程で二酸化炭素の利用法の一部が他の植物と少し違って、高温での効率が良い。通常のいわゆる C3 植物に比べ、熱や乾燥に強く、痩せた土壌でも効率よく光合成が行われる。過去に起きた地球規模の大規模な気候変動を生きぬき、過酷な環境に適応して遺伝的に進化したのだろう。他にメジャーな C4 植物と言えばサトウキビくらい。他はアワやヒエなど、人間にとって有用な植物は数えるほどしかないのだが。光合成効率の良い C4 植物の中で、穀物としてのトウモロコシの利用が広く普及したのは、もう一つ、過去に起きた別の遺伝子の突然変異が理由として潜んでいるのだが、それはそれとして、自然が起こした変異を他の植物に適用できないだろうかと考えたくなる。特に、コメは、小麦やトウモロコシに比べて比較的タンパク質が多く、穀物として優れた特性を持つ。弱点は、多湿で穏やかな生育環境を必要とすること。乾燥と熱に強くなって収穫量も増せれば、来るべき食料危機に対応する有力な解決策になる。コメに C4 光合成の機能を持たせられないか、ずっと前から気になっていた。つい最近、日本リザルツも直接・間接に多大な影響を受けているメリンダ＆ビル・ゲイツ財団が、コメの C4 光合成機能付与に研究費を拠出していることを知った。都民農園を横目で見ながら、トウモロコシの知恵がコメに移転される日々を夢想している。

2017 年 05 月 24 日

IFNA パートナーシップ会議（スペシャル編）

5 月 18 日、19 日、日本リザルツの代表白須と長坂は IFNA パートナーシップ会議に参加するためエチオピアを訪問していた。今日は会議の内容をより詳しくご紹介する。

エチオピアの Federal Ministry of Health の State Minister for Program Section である H.E. Dr. Kebete Worku からは、記念すべき第一回目の IFNA パートナーシップ会議が、エチオピアで開かれることになったことに対し、喜びの意が表された。そして、エチオピアでは依然として、栄養不足が問題になっていることを挙げた上で、政府としてもフードセキュリティに焦点をあてて施策を考案していることを紹介していた。

また、General of the Sustainable Development Goals Centre for Africa の Director である H.E. Dr. Belay Begashaw からは、SDGs の中でも栄養改善が大きく取り上げれていることを指摘した上で、特にアフリカは若い世代の人口が多いため、IFNA をはじめとした取り組みがアフリカで実施されることは非常に意義があると述べられた。

H.E. Ms. Sacko Josefa Leonel Correa, Commissioner for Rural Economy and Agriculture of the African Union Commission からは、会議を通じて各ステークホルダーが情報を共有し、更なる技術協力を進めていくことの必要性が提唱された。

世界銀行の Dr. Anne Bakilana, Programme Leader for Ethiopia からは、栄養改善プロジェクトの効果を挙げるためにも、世界銀行が詳細なデータをより多く集め、分析し、各地域の現状把握に努めていることが挙げられた。

FAO の Dr. Anna Lartey, Director of Nutrition and Food Systems Division からは、SDGs 以降の FAO の取り組みやフレームワークについて詳細な紹介がされた。

（独）国際農林水産業研究センターの岩永勝理事長からは、農業や漁業の観点から栄養改善の大切さについて紹介された。

笹川アフリカ財団の Dr. Anteneh Girma, Thematic Coordinator, Monitoring, Evaluation, Learning and Learning Theme からはこれまでの JICA との共同プロジェクトの紹介を踏まえた上で、今後 IFNA を推進させるため JICA と更なる協業を期待していた。

最後は JICA の加藤宏理事から、IFNA は日本主導（ドナードミネート）ではなく、ターゲット国と共同で、ボトムアップで行う事業であることが改めて述べられた。その上で、今回の会議で明らかになった各国の課題を今後実施する IFNA のプロジェクトに落とし込むため、今後も連携を密に取っていくことの必要性が提唱された。また、会議を通じて、更なる栄養改善と IFNA の推進に向けた期待の念が述べられた。

全体を通じて、ターゲット国が日本に対して、栄養改善に関して更なる協力を進めて欲しいという期待を持っていることが伝わってきた。

2017 年 05 月 24 日

IFNA パートナーシップ会議（スピーチ編）

5 月 18 日、19 日、日本リザルツの代表白須と長坂は IFNA パートナーシップ会議参加のため、エチオピアを訪問していた。

2 日目のミーティングでは、栄養に携わる日本の NGO の代表として僭越ながら長坂がスピーチを行わせていただいた。

こちらがそのスピーチの日本語訳。

日本リザルツの長坂優子です。
本日は、栄養改善に取り組む日本の NGO の代表としてご挨拶をさせていただく機会を下さり、本当に有難うございます。私たち NGO は、世界中のお母さんと子どもたちが健やかで笑顔に過ごせる世界を目指して、頑張ってまいりました。多くの NGO がアフリカの地で、積極的に栄養改善の活動を実施しています。具体的には、母乳育児や上下水道やトイレの整備、栄養士の育成、農業指導など、地域に根ざした取り組みを進めてきました。また、世界の NGO とも連携し、栄養改善に向けた世界的なネットワークを構築してきました。現在、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン、ワールド・ビジョン・ジャパン、日本リザルツの栄養三銃士など栄養関連の団体が一丸となって、日本政府に対し、東京オリンピックが開催される 2020 年までに栄養分野に 1,000 億円の資金拠出をお願いしています。「飢餓に終止符を打ち、食料の安定確保と栄養状態の改善を達成する」という、持続可能な開発目標の達成年は、2030 年です。昨年の 8 月、TICADⅥで IFNA が立ち上がり、日本とアフリカが連携した栄養改善への取り組みが動きだしています。今回の会議でも、皆様から栄養改善を力強く前進させようという強い意志を感じました。私たち NGO の持つパワーを栄養改善の分野により活かすために、お願いがあります。政府や研究機関などによる調査や、政策立案にも、NGO が共同で参加できる仕組みを提供していただけますでしょうか？ 誰一人、取り残されない社会（SDGs）を目指すためにも、今回の会議を契機に、更に力を合わせて、全ての人が健やかに暮らせる世界づくりができれば幸いです。本日は有難うございました。

栄養三銃士が取り組んでいる国家戦略の策定にも言及したスピーチは、国際機関や関係各省庁、そして JICA の方からも好評の声をいただいた。
更なる栄養改善の推進に向けて、日本リザルツも頑張って行きたいと思う。

2017 年 05 月 25 日

結核患者さんとの交流

5 月 20 日からケニアに滞在している。
5 月 21 日、24 日、結核抑止プロジェクトを行っているカンゲミ地区を訪問し、患者さんの生の声を聴いてきました。警官 2 人を帯同し、万全の体制で視察を行っている。

ケニアのスラム街、カンゲミ地区。
バラック小屋が並ぶ。

道や川には鼻を突く異臭を放つごみの山が。

ごみの山の異臭が鼻を突く

18 歳のアンジェリンは、3 月に結核の兆候を把握した。現在では全く動けず、高校にも通うことができていない。

元気だったころの彼女。

今は食べ物も摂ることができず、骨と皮の状態に…
彼女の望みはただ 1 つ「早く元気になって学校に行きたい」と。

36 歳のベンフィス。昨日から治療を開始した。HIV の陽性反応の診断も受けているベンフィスは、たまたま受けたスクリーニング検査で結核と診断された。奥さんと子どもが 5 人いるが、仕事は夜間の日雇い労働のため生計が立てていけず、離れ離れに暮らしているそうだ。結核の投薬治療は 6 か月かかり、「完全に治したら、奥さんと子どもに会いに行きたい」と治療を頑張ると約束してくれた。

担当の CHV クリス。「一緒に頑張ろう！」とベンフィスに力強い言葉をかけている姿が頼もしかった。
CHV のみなさんは自分が結核になったことがある、もしくは家族や知り合いが結核になったことがある方がほとんどだ。一緒に活動を行っているスタッフのカルヴィンも大切な家族を結核で亡くした経験があるそうで、当事者だからこそ、患者さんの気持ちがわかる。だから、患者さんに寄り添って、結核抑止に向かって一生懸命活動を行うことができるのかもしれない。

法務省による「子どもの養育に関する合意書作成の手引きとＱ＆Ａ」

法務省では昨年の 10 月より、タイトルのようなパンフレットを市区町村の窓口において、離婚届用紙を取りに来られた方に、同時に交付することとなっている。
パンフレットの中の、「面会交流に応じなければならないのですか」との質問に対する答えが、大切に思えた。
「面会交流は、子どものためのものであり、面会交流の取り決めをする際には、子どもの利益を最も優先して考慮しなければなりません。面会交流を円滑に行い、子どもがどちらの親からも愛されていることを実感し、それぞれと温かく、信頼できる親子関係を築いていくためには、父母それぞれの理解と協力が必要です。夫婦としては離婚（別居）することになったとしても、子どもにとっては、どちらも、かけがえのないお父さんでありお母さんであることに変わりはありませんから、夫と妻という関係から子どもの父と母という立場に気持ちを切り替え、親として子どものために協力していくことが必要です。なお、相手からＤＶ被害を受けているなど特段の事情がある場合には、以上の点は当てはまりません（面会交流をすることが子どもの最善の利益に反することもあります。）。」　夫婦の関係と父母の役割を分けて考え、離婚の際にも子どもの幸せを大切にする世の中になって欲しい。

テドロス氏 WHO 事務局長に就任

スイス・ジュネーブで開催された世界保健機構(WHO)の年次総会で、テドロス・アダノム元エチオピア保健相が次期事務局長に選出された。アフリカからは初の選出で今年 7 月 1 日に就任する。任期は 5 年。朝日新聞のインタビュー記事によると、WHO の現状については、人員や財政の不足に加え、NGO や他の国際機関との連携に課題があると、指摘されている。また、ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ(全ての人が適切な医療を、負担可能な金額で受けられる)の実現を第一に掲げている。更に、「日本のリーダーシップは特別で、緊密に連携したい」とも述べており、我々にとって大変心強い方が、トップに就かれることになった。尚、同氏に関しては、昨年 8 月にこのブログでも取り上げている。その時の趣旨は、保健相時代に保健センターや保健ポストを全国に普及させた他、グローバルファンドの資金を有効に活用し、多くの子どもの命を救った内容であった。支援を受けている国の出身者として、WHO の機能を十分活かしていただくよう、その手腕に期待している。

トウモロコシの知恵　②

トウモロコシのルーツ探しは、この三十年に劇的な展開を見た。メキシコ西部の川沿いに自生する「テオシント」が祖先と判明するまでの経緯は、小説より奇なりを地で行く感がある。探索が紆余曲折を辿ったのは、「テオシント」の外観がトウモロコシとあまりにも違うから。枝に堅い小さな実がバラバラと十個程ついている灌木状の植物で、とても食用に供せられるような外観ではない。それに、軸索に円筒状に多数の柔らかい実が連なっているトウモロコシの現在の姿は進化の原則にそぐわない。柔らかい実は殆ど無防備で鳥のエサになる。鳥の攻撃に耐えても、実が固まって地面の直下に纏まって落ちれば、仮に沢山の芽が一斉に出たとしても、互いに競合して結果的に一本もまともに成長しない。子孫を残すのにこれほど不利な形状を選ぶとは、種の保存の原則に反していて、進化の過程が想像できずに、ミステリー扱いされていた。近年の研究で、現在のトウモロコシの姿は、突然変異に加えて、人為的に改良された結果であるらしいと判ってきた。遺伝子解析の結果、アミノ酸のたった一つの突然変異で、実が纏まって成長するようになり、その後は人間の品種改良によって、実の表皮は薄く柔らかくなり、軸索に成長する実の数も飛躍的に増えた結果、今のような形になったらしい。人間の品種改良による大変身。植物の特性をこれだけ徹底的に変えた人間の営みは、驚異の一言に尽きる。たとえそれに 7 千年の営々たる農業の営みが費やされているにしても。一方、コメや麦は穂に実が沢山出来るといっても、基本はバラバラに散って子孫を残そうとする。堅い殻に覆われて、表皮を取らないと食用にならない。もし、トウモロコシの様に堅い殻が無くなり、軸索に纏まって実がなるように変われば、収穫がずっと楽になる。休耕田を利用して、飼料への転用も可能かもしれない。食料増産に向けて、トウモロコシの品種改良をコメに応用したいもう

一つの理由。７千年の人間による品種改良を、最新鋭の化学技術を利用しながら、今後の数十年のうちにコメに適用出来れば、食料危機に対する大きな武器になる。

2017 年 05 月 26 日

釜石生活 63 ～釜石新聞～

東日本大震災から 3 か月後の 2011 年 6 月 11 日に創刊し、もうすぐ 6 年になる「復興釜石新聞」（以下、釜石新聞）という新聞がある。週 2 回、水曜日と土曜日に発行され、約 5,000 戸に配布されている。
その「釜石新聞」に広告を出してみた。

全体からみると 10cm×9cm の小さなスペース

「釜石新聞」といえば、「青葉通り こどもの相談室」開設時にも記事にしていただいた。

トウモロコシの知恵　③

トウモロコシのすごさをもう少しだけ。C4 植物は光合成の際に、炭素を取り込む同位体の比率が C3 植物と異なる。食用の C4 植物は殆どトウモロコシだけだから、炭素同位体比を調べれば、トウモロコシ由来の成分比がすぐにわかる。肉を分析しても、飼料として吸収したトウモロコシの比率が判る。卑近な例として、純米酒かどうかの判別法も同じ。醸造用アルコールはコーンスターチが主成分だから。アメリカ人の肉体の組成分析をすると、半分以上がトウモロコシ由来だという人も少なくないらしい。コーンスターチを含有した食品は多いし、豚肉も牛

肉も飼料の多くはトウモロコシだからそれも当然のことだろう。ハンバーガーも半分はトウモロコシ由来。トランプ大統領もレデイ・ガガも、その身体の半分はトウモロコシが現素材かも知れない。アメリカの食糧事情は、事実上トウモロコシが支えている。その理由は、前ブログに書いたように、トウモロコシが C4 植物で、光合成能力が高く、荒地や乾燥・酷暑にも強いから。そして、突然変異と品種改良の結果、収穫が容易で収量も高いから。そう考えると、コメにトウモロコシと同じ変化を与えたいとの妄想に賛同してもらえるのではないか。コメの遺伝子改変の研究は世界で進んでおり、ビル＆メリンダ・ゲイツ財団の支援以外でも、C4 光合成能力の導入の検討が進んでいるようだ。実現すれば、日本の食糧事情が一変する可能性がある。温暖化にも、乾燥化にも耐性が高くなる。もっとも、そうなると、純米酒の判定法を新しく発明する必要がありそうだ。

美味しいパン-②

先月に続いて本日も美味しいパンの差入れを有限会社トータルマーケティングプリンティングの田島さんからいただいた。川口市内、蕨市内で店舗展開をされている Daisy というパン屋さんだ。本日のお昼に職員一同で美味しくいただいた。夕方訪問された方にも召し上がっていただいたが、感想はやはり「美味しい」だった。

2017 年 05 月 26 日

釜石生活 64 ～方言考～

一般的に、東北の方言は強いという印象がある。実際、年輩のネイティブの方同士の会話は、釜石在住 7 か月ほどの私には聞き取れないことが度々ある。先日、仮設住宅にお住いのひとり暮らしの方などに、毎日お声掛けされている支援員の若者とお話しする機会があった。見かけは、つけまつげに濃いアイラインで、いわゆる”今どきの若者”だが、支援員として気を付けていることについて、彼女はこんなことを言った。「浜言葉」のおじいさんには少々荒く早口

な「浜言葉」で話し、遠野に近い橋野方面では「遠野弁」交じりで対応するし、鵜住居あたりは、大槌・山田・宮古などの「北前弁」を使ったりしている、と。すごいホスピタリティだ。それで、彼女があるおじいさんから言われて励みになったのは、「あなたと話していると、津波で流された連れ合いが生き返ったみたいに思う」という言葉だそうだ。方言というのは、その土地で生まれ、使われ、慈しまれ、継承されていくもので、だから温かく、懐かしく、そして切ないのだろう。岩手県出身の歌人 石川啄木の「ふるさとの訛なつかし停車場の人ごみの中にそを聴きにゆく」という短歌はあまりにも有名だが、この歌の中の方言にまつわる切ない気持ちも、毎日岩手県の方言を聞いて暮らしているからこそ、しみじみと分かるようになってきた。

2017 年 05 月 29 日

Ｇ７サミット

週末にイタリアの G7 サミットが閉幕した。直前のマンチェスターのテロもあり、米国と欧州との利害関係の対立もあり、日本リザルツを含む国際 NGO としては、その成果に関して、トランプ大統領の言う‘ホームラン’級には遠いという印象はぬぐえない。発表されたコミュニケにおいて、飢餓と栄養不良に関する部分を抜書きすると以下の通り。
＊まだ Zero Hunger の道は遠く、５億人が飢餓と栄養不良に苦しむのが実情。2030 までに達成を。
＊南スーダン、ソマリア、イエメン、北東ナイジェリア等のいわゆる Sub-Saharan Africa で、内戦や政治の混乱が誘起した食糧危機と飢饉が深刻になっている。
尚、女性の地位向上や社会進出、健康問題の重要性についても触れられている。

夫婦のコミュニケーション講座の開催

先日、夫婦のコミュニケーション講座と題して、らぽーるにてセミナーを開催した。

親から受ける子どもへの影響や、コミュニケーションについて一緒に学んだ。少人数ならではの、アットホームな雰囲気で進められ、また、個々のケースについて、みなさんで考えたりもできた。そして、法制度に対する話題の中で、養育計画が無くても離婚ができてしまい、子どもの幸せを考えた離婚がなされているのか疑問に思う。個々の努力では解決が難しい状況を、制度が作り上げてしまっているので、何とかその制度が変わってくれればと願う。そして第一に、子どもへの離婚の影響が少なくなることが大切

で、子どもが親に会いたくても会えない状況がなくなって欲しい。

イエメンでコレラの第二波

イエメンでのコレラの発生が深刻な状況になってきているらしい。昨年の十月に発生したコレラの暴発は、今年に入って減少したものの、４月末から再び猛威を奮い始めている。この一月に確認された患者だけで３万２千人。死者は３００人を超え、毎日２千人ものコレラの疑いのある患者が発生し、６月には累計で患者数が１５万人に達するとも言われている。UNICEF や Gavi などの国際機関が必死の活動を続けているものの、栄養不足と清潔な水の不足が状況改善を困難にしている。こうしたニュースを耳にするごとに、内戦や政治的混乱が弱者に及ぼす結果に胸が痛む。

電通さんから靴の贈り物

本日、株式会社電通の法務マネジメント局、CSR 推進部の部長さんが、手提げで 8 袋分の靴を持参してくださいました。手提げ袋もお洒落な感じだ。エスンバ村の方々が靴をはいて、この手提げ袋を持って歩いているのを想像すると嬉しくなる。これからも中古の靴を集めてくださるそうで、期待している。

結核患者さんにお会いしました-2

5 月 20 日からケニアに滞在している。5 月 29 日も結核抑止プロジェクトを行っているカンゲミ地区を訪問し、患者さんの生の声を聴いてきました。現地スタッフのカルヴィンと一緒に、警官 2 人を帯同し、万全の体制で視察を行っている。

ウイリアムは通常の肺結核ではなく、「骨関節結核」という病気を患っており、日本では脊椎カリエスと呼ばれているのが一般的だ。かの有名な詩人正岡子規を死に至らしめた難病だ。

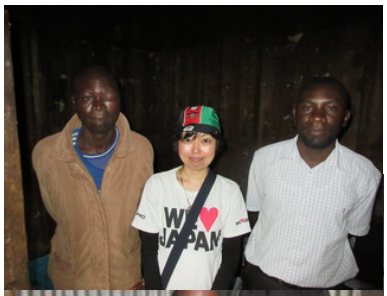
結核菌が骨や脊椎に入り込み、背骨が曲がり、痛みも伴う。ウイリアムは歩くこともままならない。通院は 2 週間に 1 度。定期的に撮影する X 線検査代は 1 回 34,000 ケニアシリング。結核の薬は無料だが、脊椎の薬は 1 錠 55 ケニアシリングで 1 日 2 回の服用が求められている。妻が靴を売って生計を立てているが、高額な治療費を賄うことは到底できない。友人が募金活動をして彼のサポートをしてくれているほか、借金をして何とかして治療費を工面しているそうだ。

彼のような難病の患者が治療を続けられるよう、ケニア政府が救いの手を差し伸べてくれることを願ってやまない。カンゲミ地区では貧困と失業も大きな問題だ。ジョンとケネディは結核はもちろん、貧困とも戦っている。

ジョンは結核と HIV を併発している。

咳が止まらず病院に行ったところ、X 線検査などで結核と診断された。

ジョンは定職には付くことができず、日雇いで靴の修理をしている。妻と子どもは養えないため、実家に帰っているそうだ。
「早く治療を終わらせて、お金を稼いで、妻と子どもに会いたい」と言っていた。



ケネディは今年 2 月から治療を開始した。妻と 2 人暮らしで、これまでは夫婦共働きで何とか生計を立てていた。ケネディは結核発症前までは鉄工作業の仕事をしていましたが、病気が原因で仕事を続けることができなくなった。

妻の仕事だけで家計を維持するのは困難で、ここ 2 か月は、家賃を払うことすらできていない。ケネディは言う。「早く完治させて、働きたい」と。

エヴァンスは結核の再発患者。今年 1 月に 6 か月間の投薬治療を終えたが、今年 3 月、再び結核の症状が出てきたことから、カンゲミ結核クリニックを訪問したところ、結核と診断された。

現在は仕事をすることができていないため、お兄さんが生活や食事の支援をしてくれているそうだ。丁度、お兄さんにもお会いできたので、現地スタッフのカルヴィンがお兄さんに「是非、結核のスクリーニング検査を受けてほしい」とお願いした。こうした地道な取り組みが結核感染防止につながっていくのだと感じた。今日のナイロビは生憎の雨模様。

カンゲミ地区の家のほとんどは簡易なもので、日本でいうバラック。雨漏りをしていたり、ご

みと泥が混じった汚水が部屋に入りそうだったりと、衛生環境の改善も大きな課題だと感じた。

2017 年 05 月 30 日

ケニアのお土産

先日代表の白須がケニアのお土産として、写真のアフリカ地図のジグソーパズルを持ってきてくれた。

アフリカの国については、学生時代に習った後で、独立国ができたりしたので、すべての国名をわかるか？と言われれば、自信はないですね。白須の 5 歳のお孫さんはすべての国名と場所を完全に覚えたそう。5 歳のお子さんに負けず、頑張って覚え直さなくては。

2017 年 05 月 31 日

ナイロビ生活 vol.17 "特別編 5"

本日(30 日)、ナイロビ市内での打ち合わせの帰り道、タクシーに乗り移動していた時、タクシーが全く動かなくなり、外がざわざわし始め、車のすぐ横で喧嘩が始まっていた。隣の車のボンネットに人が乗り叫んでいるのを目の当たりにした。結局、通常なら 20 分ほどの道を 2 時間以上かけて移動した。
ケニアに 9 ヶ月滞在しているが、このような場面に遭遇したのは初めてだ。タクシー運転手に理由を聞くと「政治だね。」と一言。「前回の大統領選のときはもっと酷かった」と語っていた。無事に事務所に戻った後、調べてみると記事の通り、現大統領が率いる与党 Jubilee(ジュビリー)と最大野党の NASA(ナサ)の支持者たち同士で乱闘があったようだ。今後、本格的に選挙戦が始まりこのような事件が多数発生すると言われている。これまで通り、万全の注意を払っていく。

2017 年 05 月 31 日

国際 NGO による栄養アドボカシー活動

本日午後、財務省に伺い、国際 NGO 三銃士（セーブザチルドレンジャパン、ワールドビジョンジャパン、日本リザルツ）7 名にて栄養アドボカシー活動を行った。国際局総務課長有泉氏に、4 月の世界栄養報告会議（東京開催）、5 月の IFNA パートナーシップ会議（エチオピア開催）等の状況を報告するとともに、今後の予算や適切な予算運用に関する意見交換の場を持つことができた。栄養分野では、日本はトップドナーとしての役割を世界から期待されています。官と民が連携しながら『顔の見える支援』を効果的に行うために、どのような枠組みが必要なのか、具体例を示しながら活発な議論が繰り広げられた。途上国で栄養不良に苦しんでいる方々に、本当に必要なサポートが行き渡るよう、国際 NGO は草の根レベルで顔の見える活動を行いながらも、拠出された予算への責任を果たせるフレークワークの構築にも努めていきたいと考えている。帰り際、顔の見える関係性を維持するため、栄養に関するプロジェクトでお世話になっている主計局の担当者にもご挨拶した。

2017 年 05 月 31 日

結核患者さんにお会いしました-3

5 月 30 日も結核抑止プロジェクトを行っているカンゲミ地区を訪問し、患者さんの生の声を聴いた。警官 2 人を帯同し、万全の体制で視察を行った。

エリザベスは、アルコールとドラッグの中毒を抱えており、多量の違法アルコールとドラッグが彼女の身体を蝕み、免疫力が低下している。今年 4 月に結核と診断され、治療を開始。脊椎にも痛みがあり、現在、精密検査をしているが、結核菌が脊椎に転移し、脊椎カリエスになっている可能性が高いと言われている。
彼女の住む Kibagare は、違法アルコールやドラッグがまん延している地域。

母親はここに住んでいると、彼女の身体を根本から治すことはできないと判断し、彼女の姉を身元引受人にし、別の場所に引っ越しをさせようと考えている。引っ越し先などをカルヴィンが親身になって相談に乗っている姿が印象的だった。

ジュディは「BrainTB」を発症している。日本では結核性髄膜炎と言われる病気。昨年 8 月に田舎の実家で突如倒れ、救急搬送された。一命を取りとめ、最初の 2 週間は集中治療室に、2 か月間の入院を経て、現在は在宅で治療を続けている。ジュディ自身は、病気の影響で節々が痛く、歩くことができないため、妹さんが身の回りの世話を行っている。通常の肺結核と違い、結核性髄膜炎「BrainTB」の投薬治療は 1 年かかる。昨年 11 月から合計 5 錠の薬を飲み続けている。

1 年間の投薬治療を終えれば、ジュディはまた歩けるようになるそうだ。彼女は言う。「治療を終えたら、田舎に戻って、子どもや孫と農作業をして暮らしたい」と。

この日は、患者さんが結核クリニックに薬を取りに来る日で、クリニックでも患者の方にお話を伺うことができた。

ベンソンは今年 1 月から結核の治療を開始した。あと 1 か月で 6 か月間の投薬治療を終了する。

症状も以前に比べ改善してきているそうだ。「治療を終えて、仕事を始めるのが楽しみ」と、残りの投薬治療に向け意欲を見せていた。
今日から結核治療を始めるエリザベート。HIV も陽性。
それまでは一般企業で仕事をしていましたが、咳が酷くなり、仕事を辞めざるを得ず、現在は貯金を切り崩して生計を立てている。彼女の望みは１つ。「きちんと治療をして、普通の生活に戻りたい」と。

街を歩いていて、学校に行けない多くの子どもたちを目にした。スラム街のカンゲミ地区では、生活環境と教育が結核抑止の大きな壁となっている。学校に行けない子どもたちも多い上、親の健康や医療に関する知識の不足もあり、家庭で健康に関して子どもに教育がなされる機会はとても少ないそうだ。それが、結核を含めた感染症のまん延につながっている。
日本リザルツの結核抑止プロジェクトが継続的に続くことで、カンゲミ地区の結核抑止はもちろん、全ての住民の方がより健やかに笑顔で暮らせる日々が来ることを期待している。

釜石生活 65 ～子育てセミナー～

5 月 27 日(土)10～12 時、「子育てセミナー」を行った。いつもは、「青葉通り こどもの相談室」の入っている青葉ビル内の研修室で行うが、今回は目先を変えて、中妻地区公民館の多目的室を借りて開催した。
今回は広報活動をいろいろとがんばりましたが、いろいろなスポーツ・観光イベントと重なってしまったり、6 月 3 日相談会、6 月 10 日親子交流会と同時期の募集となり、「楽しい」とか「癒される」という修飾語が似合うイベントへ予約が集まり、子育てセミナー参加者はとても少なかったことが残念であった。

講師は石垣秀之先生で、いつもながら、石垣先生の資料はポイントの置き所やまとめ方が素晴らしく、何かを結論付けるにも、統計学的な理論や実証に基づいているので、重みがある。

子育てポイント理解深める

青葉通り相談室セミナー

NPO法人日本ノナ　日、仙台市の中央公民館で開かれ、子どもの発達段階に応じた子育ての悩みを相談する「青葉通り相談室」セミナーが行われ、ポイントなどについて学んだ。

講師は臨床心理士の石垣秀之さん（宮城県出身）。約80人の参加者は、子育ての悩みを抱える人が多いことを指摘した。

石垣さんは、「問題行動を起こす子どもは、問題を解決したいと思っている。問題行動を通じて、問題解決を求めている」と説明。「問題行動を通じて、問題解決を求める子どもの多くは、問題行動の原因を解決すれば子育ての悩みは解消する」と強調した。

ケンカなどを通じて、自分の気持ちを表現する力を身に付けるなどの重要性を強調した。

「子育ては子どもに『自分は愛されている』と感じてもらいたい。手伝いをさせたり、物事を切り出す機会を与えるなどの工夫をしてほしい」と呼び掛けた。

子育てについて講師を交えたセミナー

両石町で停電

26日最大で19戸

復旧するまで、最大で19戸が停電した。東北電力宮城支店によると、26日午前10時ごろ、大川地区で人為的な

慶弔　かまいし

【大川】中妻町の[illegible]さんが9日、相馬郡[illegible]さんが26日、死去した。[illegible]